

氏名	栗 津 良 祐
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	乙 第 105 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和40年 3 月31日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者 (学位規則第 5 条第 2 項該当)
学 位 論 文 題 目	抗肺抗体に関する研究
論 文 審 査 委 員	教授 小坂 淳夫 教授 平 木 潔 教授 砂田 輝武

学 位 論 文 内 容 要 旨

肺疾患とくに肺結核症の臨床経過と抗肺抗体の関連を検討し、抗肺抗体の臨床的意義を明らかにした。肺結核症（287例）の抗肺抗体の出現率は43.9%で、学研病型別の観察では A, B, F, C 及び D の順でその出現率が高く、結核腫の被包及び空洞壁のうすいものほど該抗体の出現率が高い。かつ、該抗体の出現は肺結核症の病状に略々平行し、ツベルクリン完全抗体の消長とも類似した推移を示し、化学療法及び外科的療法による病巣の治癒ないし切除により該抗体は血中より漸次消失する。肺組織中の抗体の分布は病巣中心部ではツベルクリン完全抗体が、病巣遠隔部では抗肺抗体が比較的優位を占めた。実験的肺空洞形成（ウサギ）では人型結核死菌（H₃₁RV）卵白アルブミン及び同種肺エムルジオンによる感作后、夫々人型結核死菌を肺に注射したさい何れも空洞の形成と抗肺抗体の出現がみられ、組織学的所見も各抗原感作群間に差異はみとめられなかつた。

論文審査の結果の要旨

栗津良祐提出の「抗肺抗体に関する研究」に関する学位論文につき審査した結果の要旨は次の通りである。

近年臓器自己抗体の研究は自己免疫なる概念の導入以来盛んであるが抗肺抗体の面から研究した報告は少い。とくに肺結核症の進展過程の面で「ツ」アレルギーとの関連性において検討した著者の報告は全く新しいものである。

著者は国立加古川療養所に入所した肺結核症を中心として検討した成績を第1編にかかけ、雄性成熟家兎に実験的に結核病巣を肺野に作らせて検討した成績を第2編にかかっている。即ち肺結核症で抗肺抗体の出現率は病型別肺結核症の学研分類でA,B,F,CおよびDの順に高く、抗肺抗体の消長は肺結核症の症状程度とほぼ平行しており「ツ」完全抗体の消長とほぼ類似し、化学療法による病状の改善、外科的手術による病肺巣の切除により血中抗肺抗体は消失すること、結核膜および空洞を有する例ではそれぞれの被包の菲薄なもの程該抗体の出現する傾向が強いこと、肺病巣組織中の病巣中心部では「ツ」完全抗体を病巣遠隔部では抗肺抗体を比較的多くみとめることなどを明らかにしている。実験動物でえられた成績も上記の結論を裏書きするものであった。

以上の通り本論文は新しい知見に富み、学術上有益であり、著者は医学博士の学位を授与せられるべき学力を有すると認める。